大阪・水辺の遊び

むかし

❶ 天神祭

千年の歴史を持つ 大阪が誇る水上の祭典。

951年に始まった日本三大祭のひとつ。元禄時代以降、浪速の繁栄のシンボルとして隆盛をきわめ、熱気とパワーに溢れた祭りの豪華さで全国に名を馳せている。フィナーレの船渡御では、派手な囃子の音と夜空にあがる花火が、夏祭りの情緒を盛り上げ、その水と火と音の響宴は見るものを一種の酩酊状態にひきこむ。大阪水上バスによる特別桟敷席では、目の前で迫力たっぷりの祭りを堪能できる。

日時:7月24・25日　場所:大阪天満宮境内ほか。陸渡御 大阪天満宮→御堂筋→天神橋付近／船渡御 天神橋付近～大川往復／奉納花火 源八橋・桜之宮公園・桜宮橋付近　お問い合わせ:大阪天満宮 ☎06-6353-0025

❷ 道頓堀の船渡御

200余年の時を越えて甦る 優美な雅楽に酔いしれて。

2001年に230年ぶりに復活した、難波八坂神社の神事。難波リバープレイス（なんばHatch）前にできた難波船着場から、木津川近くの日吉橋と日本橋間を行き交う。16隻の船に乗り込んだ法被姿の氏子らが打ち鳴らす太鼓や、勇壮な掛け声とともに夜の道頓堀川を優雅に進む。提灯をともしながら流れる、幽玄を感じさせる船の隊列は、天神祭できらめく大阪の夏を予感させるイベントとして、歴史ある、しかし新たな水都の風景となりつつある。

写真提供:読売新聞大阪本社

日時:7月12日　場所:道頓堀川の日吉橋～日本橋の水域　お問い合わせ:難波八阪神社 ☎06-6641-1149

❸ 歌舞伎の船乗り込み

艶やかな歌舞伎役者が 演劇の街・道頓堀を彩る。

道頓堀は昭和初期まで、浪花座・中座・角座・朝日座・弁天座の浪花五座の櫓が並ぶ芝居街であった。回り舞台、セリ上がりなどの舞台技法は、江戸時代の道頓堀の劇場から世界に広まったといわれる。界隈には小屋が並び、歌舞伎や浄瑠璃が上演されていた。船乗り込みとは歌舞伎興行の際、役者が船に乗って御披露目しながら、客の来場を呼びかける江戸時代からの儀式で、歌舞伎独特の伝統行事。界隈の芝居小屋の衰退で廃れていたが、1979年に復活した。

出典:芳雪「船乗込図」　提供:上方浮世絵館

日時:6月末　場所:中之島～道頓堀川　お問い合わせ:大阪松竹座 ☎06-6214-2211

❹ 尾形船による船遊び

三味線を伴奏に唄を歌い 川辺の涼を堪能する風情。

八百八橋といわれた近世の水都「大坂」では、大川から難波橋にかけて屋形船を浮かべ、夕涼みや花見を楽しむ風景があった。旧難波橋（現在の難波橋より一筋西）あたりには、夕刻ともなれば花火が上がり、たくさんの涼み船が出て、橋の上には大勢の客が集い、大川の浜では茶店がにぎわいをみせた。近世大坂が描かれた「浪花百景」をはじめ錦絵などにも、屋形船で繰り出した旦那衆が三味線を伴奏に唄を楽しむ、粋でいなせな船遊びの様子が多く描かれている。

出典:浪花天保山風景（左）浪花百景 さくらの宮景（右）
提供:大阪城天守閣

❺ 渡し船

市内交通の担い手は 情緒ある渡し船。

市内中心部の堀や川は橋によって往来ができたが、河口部では川幅が広いうえ、水害で橋が流されることが多かったために、渡し船が陸と陸をつなぐ主要な交通手段となった。江戸時代まで溯れば、「源八の渡し」（現在の源八橋）など、各所で見られた光景である。1935年頃には渡船場31ヶ所、保有船舶数69隻を数えた。橋梁やトンネルが整備された現在も、安治川、尻無川、木津川の三河川に8ヶ所15隻の船が運航し、年間190万人以上が利用している。

場所:天保山渡船場／甚兵衛渡船場／千歳渡船場／船町渡船場／落合上渡船場／落合下渡船場／千本松渡船場／木津川渡船場　お問い合わせ:大阪市建設局渡船事務所（木津川渡船場以外）☎06-6531-0548／大阪市港湾局作業課木津川渡船事務所 ☎06-6551-3143

1

2

3

4

4